

「訪中団に参加して感じたこと、学んだこと」

3号車—B班 日本大学 宮内心優稀

今回、日中友好協会主催の訪中団に参加し、北京・長春・瀋陽の三都市を訪問しました。訪中前から中国に対しては、メディアで見るとようなネガティブな印象は特になく、むしろ広大な国土によって育まれた多様な文化や食、人々の生活に強い関心を抱いていました。以前、個人旅行で訪れた重慶では、日本人観光客が少ないこともあって少し珍しがられながらも地元の方々に温かく迎えられ、街中に漂う麻辣の香りとともに SNS では感じることでできない中国の強い印象を受けていました。今回の旅では、そうした中国のさらに違った側面を発見できるのではないかと、期待を胸に出発しました。

訪問先では、中国の長い歴史と豊かな文化を感じさせる場所が数多くありました。万里の長城や故宮（紫禁城）といった歴史的建造物は、その規模と荘厳さにただ圧倒されるばかりで、教科書で学んだ知識が眼前に広がる感動がありました。特に印象深かったのは、「九・一八歴史博物館」での見学です。満州事変（九・一八事変）については学校の授業で学んでいましたが、博物館で実際の写真や資料に触れることで、戦争の悲劇と平和の尊さを改めて胸に刻むことになりました。歴史の複雑さと真摯に向き合い、将来に向けてどう平和を築いていくべきかを深く考える、貴重な機会を得たと感じています。

そして、今回の旅で最も心に残ったのは、出会った数多くの人々の温かさでした。中国語が不自由な私に、ホテルや店のスタッフさん、市民の皆さんは、ゆっくり話しかけてくれたり、翻訳アプリや身振り手振りを交えて丁寧にコミュニケーションを取ってくださり、とても親切で温かい印象を受けました。

さらに、学生代表という光栄な役目をいただき、現地でのセレモニーでスピーチをしたり、メディアのインタビューに応じたりする機会にも恵まれました。最初は大変緊張しましたが、現地の関係者の方々や訪中団の皆さんの温かい眼差しに支えられ、無事に役目を果たすことができました。この経験は自分自身にとって大きな自信となると同時に、言葉そのもの以上に、誠意と笑顔が相互理解の第一歩であることを実感する貴重な体験となりました。

特に印象的だったのは、吉林大学と遼寧大学への訪問です。吉林大学では日本語を専攻する学生たちと交流し、お互いの言語を勉強しようと思ったきっかけや趣味、行きたい地域など様々な話題で語り合いました。共通の話題を見つけて盛り上がるなかで、言葉の壁を超えた心の通い合いを感じ、大変有意義な時間を過ごすことができました。一方、遼寧大学では、学生の皆さんが英語でキャンパスを案内してくださり、熱心に学ぶ姿勢や国際的な視野の広さに触れることができました。学生同士の交流がもたらす相互理解の可能性を強く実感し、今後さらにこうした機会が増え、両国の若い世代の絆が深まっていけたらなと思いました。

現代では SNS などのツールも発達していますので、オンライン上での継続的な交流も積極的に活かされればと思います。日本のアニメなど、共通の関心をきっかけに会話が弾むことも多く、若者同士の親しみやすい関係作りに大いに役立つと感じました。

学生代表としてのこれらの経験を通じて、私は自分自身が日中の架け橋となるような存在になりたいと強く感じるようになりました。そのためには、まず語学力をもっと磨き、現地で連絡先を交換した友達とさらに交流を深めていきたいと思います。そして、今回体験した中国の魅力、歴史の重み、そして何よりも現地の方々の温かい人情を、日本の友人や家族にありのまま伝え、相互理解の輪を広げていくことが、この訪問で得たものへの恩返しになると信じています。

最後になりますが、このような貴重な経験の機会を与えてくださった安藤団長をはじめとする随行員の皆様、終始温かく迎え、サポートしてくださった現地ガイドの方々、中国日本友好協会の皆様、そしてともにこの旅をした訪中団の仲間に関心を持っていただき、心より感謝申し上げます。今回の訪中で得た思い出と学びは、私の人生においてかけがえのない宝物となりました。心から感謝申し上げます。

「歴史に対する考え方の変化」

3号車B班 法政大学 藤貫雄士

今回の訪中を通じて、私が最も大きな心境の変化として感じたのは、歴史に対する意識の変化です。今年は終戦から80年であり、また訪中が行われた9月は「918事件」が発生した月でもあります。日中関係にとって特別な意味をもつ時期に中国を訪れたこと自体が、私にとって非常に重く、忘れられない体験となりました。

出発前は、大きな不安を抱えていました。緊張が高まっている時期に日本人として中国を訪れることに対し、現地で敵意を向けられるのではないか、襲われるのではないかという漠然とした恐怖がありました。しかし、実際に現地に足を踏み入れると、その不安は次第に薄れていきました。人々が普通に生活を営み、街が活気にあふれている姿を目にしたとき、誤解をしていたと感じました。現地に触れることで、中国をより深く理解する必要があると実感し、歴史を自分ごととして考える姿勢が芽生えていきました。特に印象に残ったのは、918歴史資料館を訪れた時の体験です。入り口に掲げられた「918を忘れるな」という言葉は、中国の人々が世代を超えて持ち続ける記憶と痛みを表していると感じました。展示室に足を踏み入れると、事件当時の写真や資料、被害を受けた人々の証言などが並び、当時の緊迫した空気が伝わってきました。私はそこで、自分が歴史を十分に理解していなかったことに気づかされました。教科書では「918事件」という出来事を知識として覚えていたに過ぎず、その背後にある人々の恐怖や苦しみ、そしてその記憶を後世に伝え続けようとする努力には思いを巡らせていなかったのです。改めて、歴史は過去に終わった出来事ではなく、現在の人々の心や国際関係に確実に影響を与え続けているものだの実感しました。

また、故宮を訪れた際にも、歴史の重みを強く実感しました。実際にその広大な空間に立ち、かつて皇帝が政治を行った場所を目にすることで、中国の歴史が持つ圧倒的なスケールを体感しました。出発前に映画『ラストエンペラー』を観ていたこともあり、映像で見ていた場面と現実の建造物が重なったときには、単なる知識ではなく「生きた歴史」に触れた感覚がありました。壮麗な建築物や広大な中庭を前にすると、日本の歴史遺産とは異なるスケールと文化的背景を感じ取ることができ、歴史の伝え方や残し方についても深く考えさせられました。さらに、吉林大学での学生交流も大きな学びとなりました。同世代の学生が流暢に日本語を話し、生活や大学での学びについて語ってくれたことに強い刺激を受けました。そうした交流の中で、言語の壁を越えて理解し合うことの可能性を実感すると同時に、私自身も中国語を学び、もっと深く相互理解に関わりたいと強く思いました。その後もSNSなどを通じて連絡を取り合っており、この出会いが単なる一時的なものではなく、将来につながる大切なきっかけとなったことを実感しています。

7日間という短い時間でしたが、今回の訪中中で得たものは非常に大きなものでした。訪中前に抱いていた不安は、歴史を学び、人々と交流する中で、確かな学びと前向きな考えへと変わりました。そして何より、歴史を単なる過去としてではなく、現在そして未来に連な

るものとして考える意識が強まりました。私は今回の経験を通じて、これからも歴史を学び続けるとともに、その学びを他者と共有していきたいと思います。複雑な歴史を抱える日中両国だからこそ、若い世代が正しく歴史を理解し、交流を通じて相互理解を深めていくことが必要です。今回の訪中で得た学びと出会いを大切に、国際社会に貢献できるよう努力したいと思います。

「中国での体験・及び学び」

3号車-B班 東海大学 前田孔陽

今回の中国訪問は、単なる観光旅行ではなく、歴史の現場に触れ、文化を学び、人々と交流することで、多面的に中国を理解する機会となった。短い日程の中で北京、長春、瀋陽という三都市を巡り、それぞれの地域が持つ歴史的背景や文化的特色を体感することで、これまで書物や報道から得ていた中国像が大きく立体化したと感じている。

まず訪れた北京では、万里の長城の雄大さに圧倒された。実際に急な石段を登りながら、かつての人々が外敵の侵入を防ぐために築き上げた膨大な労力と、国を守るという切実な思いを強く感じた。故宮では、壮麗な宮殿の連なりや精巧な装飾に触れ、中国王朝の権威と長い歴史の積み重ねを実感した。同時に、中国共産党歴史展覽館を訪れることで、近代以降の歴史をどのように位置づけ、自国民に伝えているのかという視点にも触れた。歴史は一つの実事であっても、その伝え方や見せ方によって意味づけが大きく変わることを実感し、歴史認識の難しさを改めて考えさせられた。

長春に移動してからは、中国東北地方ならではの歴史と文化を学ぶことができた。東北陥落史陳列館では、日本との関わりを中心に展示がなされており、過去の出来事がいかに現地の人々の記憶に刻まれ、今日まで影響を与えているかを痛感した。展示を通じて、歴史の痛みを忘れずに記録し続ける姿勢に触れ、私たち自身も過去と誠実に向き合う責任があると強く感じた。また、吉林大学での交流や民俗文化体験は、中国の若者や地域の人々の生活や価値観を身近に知る大きな機会であった。特に学生たちの学びに対する真剣さや未来志向の考え方には刺激を受け、日本の若者としてどのように国際社会に関わっていくべきかを考えさせられた。

瀋陽では、より現代的な都市の姿と同時に、歴史を直視する場面も多かった。「九・一八」歴史博物館や遼寧省博物館を訪れることで、近代の戦争や植民地支配の記録を中国がどのように保存・継承しているかを知ることができた。それは時に日本人として胸が痛む体験もあったが、同時に過去から学び、未来を築くために不可欠な過程であると感じた。さらに中国工業博物館や紅梅文創園では、近代産業から現代文化への発展の歩みを見て取ることができ、中国社会が伝統を残しつつ新しいものを取り込み、柔軟に変化している姿を印象深く感じ取った。

最も心に残ったのは、中日青年交流夕食会である。互いの国の歴史や政治には時に複雑な問題があるが、実際に顔を合わせ、同世代として言葉を交わすと、そこには率直さと好奇心、そして前向きなエネルギーがあった。文化や歴史の違いを越えて、同じ未来を生きる仲間としてつながれるのだという実感は、この旅で得た最大の成果である。

今回の訪問を通じて、中国は巨大で複雑でありながらも、人々の暮らしや文化の中には温かさと活力があふれていることを学んだ。同時に、歴史の重みを忘れず、未来に向けて対話と理解を深めていく重要性を痛感した。旅行前に抱いていた「中国を知りたい」という漠然と

した思いは、実際に土地を歩き、人と交わり、文化を体験することで大きく前進した。これからは、この経験を単なる思い出にとどめず、自らの学びや国際的な交流活動に活かしていきたいと強く思っている。

「訪中を終えて」

3-B 法政大学 松尾明日香

今回の訪中を通して、私は自分が中国に対して抱いていたイメージと、現地で実際に見聞きしたこととの大きな隔たりを強く感じました。出発前、私が持っていた中国像は、尖閣諸島などをめぐる領土問題で日本と対立し、日本に対して敵意を抱いている国、というものでした。ニュースや報道の影響もあり、中国は常に「反日」の立場を取っているのではないかと考えていたのです。

そのような先入観を持ちながら訪れた中国で、最も印象的だったのは各地の歴史系博物館でした。展示では日本を「ファシズム国家」と位置づけ、抗日戦争を「反ファシズム戦争」として語る説明が随所に見られました。私はこれまで日本で教育を受けてきましたが、「日本がファシズム国家だった」という実感を持つ機会はありませんでした。日本の歴史教育では、日中戦争そのものに多くの時間を割くというよりも、太平洋戦争の敗北やアメリカとの戦いの経過に重きが置かれています。そのため、日本が中国に侵攻したこと自体は学んでいても、その加害の歴史や中国側の受け止め方について深く意識することは少なかったのです。博物館での展示を通じて、歴史をどう記憶し、どのように解釈するかは国によって大きく異なるのだと実感しました。

特に瀋陽の「九・一八歴史博物館」は強く記憶に残っています。展示は非常に丁寧に作られており、日本軍の侵略行為やその残酷さが迫力をもって伝えられていました。実際にその場に立つと、日本がなぜ嫌われているのかを肌で感じざるを得ませんでした。日本国内にいるだけでは、自国の加害の歴史が薄れてしまいがちですが、この博物館はその事実を直視させる力を持っていました。

帰国後、私はこの経験をアルバイト先で知り合った瀋陽出身のおばあさんに話しました。私は、展示で受けた衝撃や、日本が「ファシズム国家」として描かれていたことに驚いたと率直に伝えました。すると彼女は、「起きてしまったことはもう歴史だから仕方がない」と語り、さらに「国をまとめるために中国が反日を強調するのは良くない教育だ」とも言いました。その言葉は非常に意外であり、私にとって大きな学びでした。私は中国を訪れる前は、現地の人々も皆が同じように反日的だと考えていました。しかし、実際には中国の中にも多様な考え方があり、歴史教育や国家の姿勢に対して批判的な見方を持つ人がいることを知ったのです。

この経験を通して、私は歴史認識の多様性について深く考えるようになりました。歴史の事実そのものは変わらないとしても、それをどう語り継ぎ、どのように学ぶかは国や地域、

そして個人によって異なります。日本の教育が伝える歴史、中国の教育が伝える歴史、そして現地の人々が抱く歴史観——それらはそれぞれ異なる立場から形づくられています。今回の訪中は、それらを比較し、自分自身の視点を問い直す大切なきっかけになりました。

訪中を終えて最も強く考えるのは、歴史を一方的に理解するのではなく、相互に学び合う必要性です。日本にいと、日本の歴史教育や報道を通じて一面的な理解にとどまりがちです。しかし実際に中国を訪れ、現地の人々と交流することで、多様な視点が存在することを肌で感じることができました。歴史は国と国との関係を左右する大きな要素ですが、その捉え方は一つではなく、複数の立場を尊重する姿勢が求められているのだと思います。

今回の訪中を経て、私はこれからも歴史を自分ごととして考え続けたいと感じています。そして、日中両国の間に横たわる歴史認識の違いをただ「溝」として捉えるのではなく、その違いを出発点に対話を重ね、理解を深める努力をしていきたいと思います。私自身、教育を学ぶ立場として、将来はこの経験を生かし、若い世代に歴史を多面的に捉えることの大切さを伝えられるようになりたいと考えています。

「7 日間の訪中体験が私にもたらしたもの」

3 号車 B 班 日本女子大学 萩原未優

日中関係の重要性が語られる一方、私自身もメディア情報による先入観を抱いていた一人だった。その固定観念を自らの体験で検証したいと考え、訪中に参加した。7 日間の滞在は、私の中国観を根底から覆すものだった。本稿ではその変化の過程を記し、今後の向き合い方と、異文化理解の重要性に述べていく。

訪中前の私は、歴史問題や一部の報道から、中国の人々は日本人に対して冷たく、厳しい感情を抱いているのではないかという漠然とした不安を抱いていた。国家間の複雑な関係がそのまま個人の感情に直結していると思い込み、笑顔で受け入れてもらえるだろうかと、心配ばかりが先行していた。

しかし、その固定観念は現地の大学生との交流で完全に覆された。彼らは初対面の私たちを温かく迎えてくれたのだ。特に忘れられないのが最終日の送迎会での出来事だ。コミュニケーションを取りたかった私は拙い言葉で、翻訳機を使いながら会話をしていたが、嫌な顔せず交流を楽しんで笑顔で行ってくれた。個人として真摯に向き合おうとするその言葉と眼差しは、私の心の壁を溶かすのに十分だった。メディアが描く姿とは全く違う、等身大の彼らの温かさに、私は深く胸を打たれた。

『中国人は冷たい』という考えは、私の勝手な思い込みに過ぎなかった。実際に触れ合った彼らは愛にあふれ、国籍など関係なく一人の人間として、優しくフレンドリーに接してくれた。国という大きなフィルターを外し、個人として向き合うことの重要性を、私はこの旅で痛感した。

政治や歴史の問題が両国間に横たわるのは事実だ。しかし、そうした大きな課題があるからこそ、私たちが体験したような草の根の交流が不可欠だと考える。国という枠を超え、個人として心を通わせる経験の積み重ねこそが、揺るぎない相互理解の土台となるはずだ。今後は、一方的な情報に流されることなく多角的に物事を捉え、今回の貴重な体験で得た気づきを自分の言葉で周囲に伝えていきたい。この小さな一歩が、真の隣人関係を築く力になると信じている。

また、「百聞は一見に如かず」という言葉の意味を、私はこの七日間で身をもって知った。自ら行動し、体験することこそが、固定観念を打ち破る最も確実な方法だと学んだ。この経験は、私に物事を多角的に捉える視点を与えてくれただけでなく、国際的な交流や異文化理解という分野への強い関心を芽生えさせた。将来、何らかの形で日本と中国の架け橋となるような活動に関わりたいという、新たな目標を持つきっかけにもなった。

訪中前に抱いていた先入観は、現地での温かい出会いによって完全に払拭された。政治や歴

史といった大きな主語ではなく、一人ひとりの個人として向き合うことで見えてくる真実がある。この七日間は、人と人との繋がり of 貴さを教えてくれた私の人生の転機だった。この貴重な経験を胸に、今後は私自身が日中相互理解を促進する小さな架け橋となれるよう、努力していきたい。

「訪中国に参加して」

3号車B班 東京外国語大学 中沢結希

私が今回の訪中国に参加し、北京・長春・瀋陽を訪れた経験は、確実にこの夏のワクワクリストに追加されるだろうと思います。空の上から見ても全部同じ形の巨大なマンションや次から次へと運ばれてくる料理の数々、道端で喧嘩をする人や痰を吐いている人、たくさんの青や黄色のレンタル自転車、近代的かと思えば歴史的な建物が建つ街並み、最低限の面積のドアを備えたトイレ、きらきらした伝統衣装とお化粧を施した綺麗な女性（男性？）など、ただ道を歩いているだけでも初めてみるものが多く、本当にたくさんのときめきを感じさせてくれる一週間でした。この感想文では、訪中の7日間での出来事を振り返りながら、訪中前と訪中後の中国に対する気持ちの変化や訪中が自分に与えた影響について触れ、自分や日本が隣国隣人として今後どのように中国（人）と付き合っていくことが望ましいかということについても考えていきたいと思います。

もともと私は中国の映画やドラマ、女優さんが好きで、中国に対してもイメージはどちらかというと憧れに近いようなものを感じていました。実際に見た中国の街並みは私が映画やドラマで素敵だと感じたものと近く、実際に故宮を訪れた時も、ドラマの世界に入り込んだようでした。街や人の飾らない感じもとても魅力的でした。また、中国の大学生については知っている情報が少なく、特に事前に持っているイメージなどはありませんでしたが、現地の方と実際に交流をしてみると、共通点も相違点も見つかっておもしろかったです。ただ、中国人と日本人という感じではなく、あくまでもお互いに同年代同士という感じがして親近感を感じることができてなんとなく嬉しかったです。

今回の訪中は、行く場所や食べるもの、泊まる場所など全てが中国をよく知る方々に準備していただいたものであり、期間も一週間というどうしても短い期間であるため、中国という国のほんの一部分を知ることができただけに過ぎないと感じます。だからこそ、今回の訪中を通じて、また中国に行きたいと強く思いました。中国を理解するためのキーワードは、その歴史や言語、文化などさまざまあると思いますが、今回の訪中はより深く中国を知ろうとする好奇心の火付け役になりました。特に今回瀋陽で訪れた九・一八歴史博物館は印象的で、歴史についてもっと学びたいと思うきっかけになりました。また、この訪中で仲良くなることができた仲間との縁は、この訪中で得た最もかけがえのないものの一つだと思います。この縁を今後ずっと大切にしていきたいです。

そして、最後に自分や日本が隣国隣人として今後どのように中国（人）と付き合っていくことが望ましいかということについて、正直私はまだ明確な答えを出すことができていません。でも、まずは相手を知ろうとする気持ちが一番大切なのではないかと思います。実際に、本当に些細なことではありますが、「ありがとう」という言葉だけでもその都度中国語で言ってみると、笑顔になってくれることが心なしか多かったように感じました。今回の訪中での経験を忘れずに、今後の学びを深めていければと思います。

「中国を訪れて」

3号車B班 三重大学 出口昂靖

今回、私は訪中団を通じて中国という国を訪れ、多くの感情に出会いました。歴史の重みを前にした驚き、人々との交流から得た喜び、文化の違いに戸惑う瞬間、そして時に悲しみを覚える場面もありました。これらすべてが、私にとってかけがえのない経験となりました。その中でも最も印象深かったのは、中国の人々がもつ「共同体としての力強さ」です。広大な国土と人口に裏付けられた経済力、そして日々の生活をより豊かにするために国家や地域といった大きな組織に貢献しようとする姿勢に、深く心を動かされました。

日本では西欧的思想の影響もあり、個人主義的な価値観が広がっています。私自身も一人旅をするなど、常に「個」を中心に生きてきました。しかし中国では、コミュニティに尽くすことが結果的に自分の幸福につながるという意識が根付いており、その在り方から「なぜ中国が今も世界有数の経済力を誇れるのか」を実感しました。

今回の旅では、号車ごとの団体行動を通じて仲間と協力し合う大切さや、そこから生まれる人間ドラマを体験しました。それはこれまでの自分の生き方を振り返り、新たな成長を実感する大きなきっかけとなりました。

さらに、訪中団で交わした会話の中でも、特に団長から頂いた言葉が強く心に残っています。

「30代以降の人生は、決して自分一人のものではない」

多くの人と出会い、職場でも私生活でも人と関わり、それらを束ねる立場になる。そのときに、いかにリーダーシップを発揮し、責任を持って行動できるかで、人がついてくるかどうかが決まるのだと教わりました。

私はこの言葉を胸に、今後はより強い責任感をもって組織や仲間に向き合い、周囲とともに成長できる人間へと歩んでいきたいと思います。そして、そのような在り方をすでに体現している社会が中国にはあると感じました。日本とは異なり、人々の距離感が近く、常に誰かとともに行動しながら感情やアイデアを共有する。時に対立が生じて、それを乗り越え、さらに良いものを創り出そうとする姿勢に強い刺激を受けました。

一方で、過去の日本が時代の波に吞まれ、残虐な行為をしてしまった歴史も忘れてはなりません。その反省を踏まえたうえで、新たな方策のもと健全かつ温和な態度で近隣諸国との経済発展を目指すことが、これからの日本に求められていると感じました。私自身もその一端を担うべく、日々の活動に精を出し、より良い社会の実現に貢献していきたいと考えています。

「実際に行って感じた中国」

3号車—B班 法政大学 風間里菜

1, 初めに

「2025 日中友好大学生訪中団第3陣」では北京・長春・瀋陽の3都市を訪れた。そして、一番記憶に残っている事は、訪中前と後で中国に抱いていた印象が変わった事である。本感想文では印象が変わった部分の内、特に顕著に変わった「都市」と「人」の二つに焦点を当てて、訪中による印象の変化について述べていきたいと思う。

2, 訪中による印象の変化

a, 都市

訪中団に参加するにあたって志望理由を書く際には「長春都市企画館」に行く事が決定していなかったため、都市に関してはあまり志望理由として特筆していなかった。しかし、元々都市計画に興味があったため、「長春都市企画館」をはじめとする長春の街並みは大変興味深かった。以前上海に行ったことがあるだけでなく、長春に行く前に北京に行っていたため、長春の街並みが中国における一般的なものではないことはすぐに分かった。長春の街並みを見て最初に感じた事としては、欧米風だということである。勉強不足で、長春に着いた時にはこれらの街並みが新京時代に日本が作り上げたものか否かが分からなかったが、都市企画館に行った事でこれらは日本が作ったものを基にしている事が分かった。企画館で見たビデオから日本統治が終わった事で真の長春を取り戻したというニュアンスを感じたにも関わらず、日本が当時立てた建物を今でも使っている事に疑問を感じたため、帰国後に自分なりに調べてみた。その結果、自身が一番有力だと感じた理由は、人の生活を扱う都市計画では、現実的な都市運営を実現する必要がある、小さな解決を積み重ねていかなければならない、というような解釈であった。つまり、既にその地で人々が暮らしている以上、建物を壊して一から街を作り直す事は不可能に近い状況であったのではないかという考えである。あくまで、これは私自身が自分なりに調べた情報を基に考えた理由であるため、決して本当の答えなどでは全くもっていないが、自分なりに腑に落ちる答えは見つかった。

話を印象の変化に戻すと、少なくとも今回訪れた都市では、現代中国の生活様式に合った都市開発が進められていたという事である。訪中前は中国の都市も世界中の都市とあまり違いは無いのではないかと思っていたが、歩道や車道等の車線の割り振りや、商業施設と住宅地のエリア分けなど、かなり計画的に行われていた印象を受けた。そして、これに関しては新京時代を経た長春も例外ではなく、日本が立てた建造物や道路を残しつつも、川沿いに広がる都市計画や、地下鉄の計画等、現代中国の生活に合わせて新たな都市計画が進められていると感じた。

b, 人

訪中前に感じていた中国人のイメージは、日本で生活している中国人や日本に観光に来ている中国人に抱くようなイメージであった。特に大学で多くの留学生と接する事が多かったため、皆裕福で、一般的な日本人よりも豪勢な生活を送っている印象があった。しかし、今回首都である北京だけでなく、地方都市にも訪れた事で、これらの印象はかなり変わった。多くの現地で出会った中国の人々は、日本で目にする中国の人々とはかなり違うように感じた。この事象に関して冷静に考えると、普通、多くの人々は自国で生活する事がほとんどであると考えられる。そのため、日本にいる、すなわち海外にいる人々の層と、中国にいる、すなわち自国で生活している人々の層には多少なりとも違いがあると考えられ、訪中によって感じた人々に対する印象の違いは、これに起因するものであると推測する。

3, 最後に

ここまで「実際に行って感じた中国」というタイトルの下、訪中による印象の変化について、自己の推察も含みながら、ある種分析するような形式で述べてきた。しかし、感想という点で訪中の日々を振り返ると楽しい事ばかりであった。中国語が不自由でも、理解しようとしてくれる人が大変多かったり、困った素振りをしていた時に助けてくれる人もいたり、中国の人々の持つ人情の熱さを実感する事が出来た。また、様々な街並みの観察や人々との出会いを通じて、以前よりも格段に中国に対する解像度を上げる事が出来た。今回の訪中では、中国語の不出来により不甲斐なさを感じる局面が数多くあったため、帰国後はより一層中国語学習に力を入れたいと思う。

「広がる世界」

3-B 徳島大学大学院 井原礼聖

訪中団を終えて、中国に対する私の印象は少し変わった。出発前は「中国に悪い印象を持っている」というよりも、「警戒が必要かもしれない」という思いが強かったが、帰国後は「思っていたほど悪くないのでは？」という印象に変わった。

訪中前は、中国の街を歩くだけでも暴言を吐かれたり、威嚇されたりするかもしれないと覚悟していた。なぜなら、現在の日中関係は決して良好とは言えず、戦争から 80 年という節目を迎える中、反日感情が高まっていると事前に聞かされていたからだ。さらに、反日映画が大ヒットしているというニュースも目にし、「日本人であることを理由に敵意を向けられるかもしれない」という恐れが心のどこかにあった。

しかし、実際に中国の観光地や街を散策しても、そのようなことは一度も起こらなかった。むしろ、故宮を訪れた際、漢服を着た中国の方に写真をお願いすると快く応じてくれ、「ありがとう」と日本語で返してくれる人もいた。

吉林大学を訪問し、現地の大学生と交流した際には、流暢な日本語を話す姿に感銘を受けた。彼らは日本のアニメや観光地にも関心を持っており、「日本が好き」という気持ちが強く伝わってきた。限られた学生との交流ではあったが、私たちに向けられたその好意は、国境を越えて人と人がつながる可能性を実感させてくれた。

また、「九・一八歴史博物館」や「東北陥落史陳列館」を見学する中で、日本の教科書だけでは知ることのできない、中国側の視点からの歴史を学ぶことができた。特に、日本が戦争において生物兵器を使用していたという説明には驚かされた。展示されていた当時の写真はどれも悲惨で、もし自分がその戦争に直面していたらと思うと恐ろしく、二度と繰り返してはならないと強く感じた。

お互いが戦争を通して憎しみを抱いた歴史は、決して忘れてはならない。しかし、吉林大学の学生が日本に興味を持ってくれていたように、日本も中国への理解を深める努力が必要だと感じた。戦争の歴史を胸に刻みつつ、いつかお互いがより深く分かり合える日が来ることを願っている。

今回の訪問は、中国との交流だけでなく、訪中団メンバーからも大きな刺激を受ける機会となった。それぞれが個性を持ち、尊敬できる点を多く持つ仲間たちと出会えたことは、私にとってかけがえのない経験だった。1 週間という短い期間ではあったが、ファミリーと言えるほど絆が深まった。私は徳島の田舎で育ち、大学でも限られたメンバーと過ごすことが多かったが、全国各地の学生と交流することで、「同じ日本でもバックグラウンドが違えば、考え方も大きく異なるのだ」と実感し、世間の広さを改めて感じた。

この経験を通じて、自分の価値観や視野は大きく広がり、人として成長できたと感じている。実際、帰国後に街で困っている外国人を見かけた際、ためらわず声をかけて助けることができた。訪中団で学んだ「相手を理解し、歩み寄ろうとする姿勢」が、日常の行動にも表

れているのだと思う。今回の訪問で得た学びと感動を忘れず、今後も異文化理解と対話を大切にしながら、自分の世界を広げていきたい。

「歴史を学び、未来を考える」

3号車—B 上智大学 白倉帆夏

今回の訪中で最も印象に残ったのは、中国の代表の方が「日本軍と日本人は別のものとして考えている。日本人もまた日本軍の被害者だ」と語ってくださった言葉でした。この考え方は私にとって非常に新鮮であり、強く心に残りました。戦争の加害と被害はしばしば国単位で語られますが、そのお言葉は国境や民族といった枠組みを超え、個々の人間に目を向けるものでした。もし多くの人がこの視点を共有できれば、歴史をめぐる憎しみや対立は和らぎ、より平和な世界に近づけるのではないかと強く感じました。私自身、それまで「戦争＝国と国との対立」という理解にとどまっていた部分があったため、今回の経験は視野を広げる大きな契機となりました。

訪問中には、9.18 博物館などの歴史施設にも足を運びました。日本人である私にとっては、直視するのがつらい部分も多くありましたが、それ以上に「過去から目をそらさずに学ぶこと」の大切さを痛感しました。過去を知することは自らの責任を背負うことではなく、未来に向けてよりよい関係を築くための出発点になるのだと理解できました。

さらに心に残ったのは、6日目の歓送レセプションでの「歴史を学ぶことは憎しみを続けるためではなく、新しい道を切り開くためである」という言葉です。確かに、歴史教育では「忘れてはならない」という姿勢が強調されがちですが、ただ忘れないだけでは、記憶が対立や憎悪の再生産につながる危険もあります。大切なのは、過去を未来への指針とすることです。その考えに触れて、私は「歴史をどう学び、どう活かすか」という主体的な姿勢が求められているのだと改めて気づきました。これまでは、歴史をテストのために覚える「知識」としてとらえていた部分がありましたが、今回の訪中を通じて「歴史は未来を形づくるための学び」であると実感しました。

また、交流の場では、中国の学生の方々と直接お話しする機会もありました。特に印象的だったのは、中国の学生の皆さんが日本に強い関心を抱き、日本語や日本文化をさらに深く理解しようとしている姿勢でした。そのような思いを知ったとき、私は大きな安心感と喜びを覚えました。会話の中では「日本のアニメが好きだ」「ぜひ日本を旅行してみたい」といった話題で盛り上がり、文化を通じて自然に心の距離が縮まっていくのを感じました。国際関係という大きな枠組みでは緊張や対立が強調されがちですが、実際に人と人とが向き合えば、そこには温かさや共感があるのだと実感しました。こうした一つひとつの交流の積み重ねこそが、隣国同士の信頼関係を築いていく土台になるのだと思います。

日本と中国は地理的にも文化的にも切り離すことができない存在です。だからこそ歴史を正しく理解し、互いに尊重し合いながら未来を築く努力が求められています。この7日間の経験は、私自身の人生にとって大きな意味を持ちました。歴史を学び、人々と直接対話するなかで、「平和は誰かに任せるものではなく、自分自身が関わっていくものだ」と気づいたからです。将来、どのような職業に就くとしても、この経験で得た学びは必ず活かされ

ると信じています。歴史を学ぶこと、異文化に触れることは、自分の視野を広げるだけでなく、社会全体を少しずつ良い方向へ変えていく力になるのだと思います。

今回の訪中は、単なる異文化交流を超え、私の歴史観や世界観を問い直す大きなきっかけとなりました。今後も歴史を学び続け、理解と協力を基盤とした関係づくりに少しでも貢献できるよう努力していきたいと考えています。そして、この経験を自分の学びや将来の進路に生かし、隣国との信頼関係の構築、さらには国際社会の平和に役立てていけるよう努めていきたいです。

「『九・一八』歴史博物館見学を通じて」

3号車-B班 法政大学 小田彩愛

今回の訪中は、中国抗日戦争勝利八十周年を記念する時期であったため、「九・一八」や日中戦争に関する博物館や資料館を見学させていただく機会に恵まれた。

私もそうであったが、多くの日本人は「九・一八」が何を指すのかを知らないだろう。満州事変や柳条湖事件を歴史で学ぶことはあっても、単なる歴史として学ぶだけで、それに伴う被害者の方や中国側のダメージを詳細に学ぶことはなかった。

私が特に印象に残っているのは、「九・一八」歴史博物館の来館者数だ。

私たち訪中団は九月十二日に「九・一八」歴史博物館を訪れた。館内には九月十二日の来館者数が表示されており、一万人を優に超えていた。

つまりその日、一万人を超える人々が、日本が中国を侵攻し、人を殺めた史実を学びに「九・一八」歴史博物館を訪れていたのだ。

さて、日本で一番有名な戦争に関する博物館といえば広島平和記念資料館であろう。今年の広島平和記念資料館来館者は、現時点で八月十一日に最も多く、一万四千三百十一人である。九月一二日の「九・一八」歴史博物館の来館者数と同等だ。

私も今年の八月下旬に広島平和記念資料館を訪れた。広島平和記念資料館では、原爆によって亡くなられた方の凄惨さや、原爆がもたらした被害のむごさを目の当たりにすることになった。私は日本人で、日本は原爆を落とされた「被害国」である。だからこそ、考えさせられることも、感じることも多かったように思う。

しかし、「九・一八」歴史博物館では、日本は「加害国」である。展示の中には、目をそむけたくくなるような残虐な写真や記録が残されていた。例えば、日本軍に反発した民間人の方がどのようにして処刑されたり、拷問されたりしたかの実物展示や、日本軍が細菌実験や兵器実験をどのように中国で行っていたかの展示があったりした。

私たちは、「被害国」である日本の認識は持てども、「加害国」である日本の認識は持ち合わせていないだろう。日本は唯一の被爆国として、平和教育や平和主義を軸とした価値外交を押し進めているが、その中で日本の加害性に触れることはあっただろうか。

日本は、日本がかつて帝国主義であったことを忘れていくのではないだろうか。

以上のことから私は、日本人が「九・一八」を知らないことが、日中関係に溝を生じさせるのではないかと考えた。なぜなら日本人が原爆について考えるのと同様、もしくはそれ以上に、中国人は「九・一八」について考えているからだ。先ほど「九・一八」歴史博物館、広島平和記念資料館、両来館者数の近しさについて述べたが、日本人が原爆を当たり前知

っているように中国人は「九・一八」を知っているのだ。

特に最近、「九・一八」をテーマにした南京写真館という映画が中国で大ヒットし、話題をよんでいる。

日中関係を良好にしていくためには相互理解が大事だとよくいわれるが、このように歴史認識に齟齬が生じていれば、相互理解にも齟齬が生じてくるだろう。

それを防ぐためにも、私たち一人ひとりが歴史を学び、正しく日中関係を捉え、交流していくことが必要になってくるのではないか。

だからこそ、一人の日本人として、「九・一八」について現地で学び、考えることのできた経験は私の大きな財産になった。

最後に、訪中の中で特に印象深かった中国語を紹介したい。

「铭记历史、珍爱和平」

歴史を忘れず、平和を大切にという意味だ。

戦争について学び、今後戦争なんかさせない、しないと思うことが大切だと、訪中を通じ、改めて感じた。

「過去を学び、未来を紡ぐ 訪中国での七日間」

3号車B班 法政大学 櫻庭光璃

私はこのたび、訪中国の一員として一週間にわたり中国を訪れる貴重な機会を得た。短い期間ではあったが、現地の大学生や市民との交流、歴史的施設の見学を通じて、多くのことを感じ、学ぶことができた。とりわけ「九一八博物館」を訪れた体験は、私にとって強烈な印象を残し、中国に対する理解や今後の日本と中国の関係を考える上で大きな契機となった。

訪中前、私は中国に対して漠然としたイメージしか持っていなかった。中国へは幼い頃から何度か訪れていたが、街並みや人々の雰囲気などしか知らなかった。近年のニュースでは経済成長の著しさや国際的な影響力の拡大が強調される一方で、政治体制や日中間の摩擦が報じられることも多い印象である。中国の人々についても、旅行や留学生を通じて接する機会があったものの、歴史や社会に根差した価値観を実感する機会は少なく、理解が浅いままで今日まで過ごしていたように思う。

そうした私にとって、九一八博物館の訪問は大きな衝撃であった。この博物館は、1931年の満州事変(9月18日)を契機とする日本の侵略の歴史を記録し、展示する施設である。館内には当時の写真や資料、犠牲者の証言が数多く展示されており、日本人である私にとっては目を背けたくなるような内容も少なくなかった。とりわけ、一般市民が戦争によってどれほど苦しみ、生活が破壊されたかを生々しく伝える展示は、心に重くのしかかった。これまで歴史の教科書や授業で学んだことはあっても、現地で目にし、耳にすることによって、初めて「自分の国が引き起こした出来事」として切実に感じられたのである。

同時に印象的だったのは、博物館を案内してくださった方々の姿勢である。中国の人々は決して過去を忘れてはいないが、それを単なる憎しみとしてではなく、平和の教訓として次世代に伝えようとしていたように感じた。その姿勢に触れ、私は深い尊敬の念を抱いた。

この体験を通じて、私の中国観は大きく変わった。訪中前の私は、中国を「経済大国」「政治的に日本と対立する国」といった表面的なイメージで捉えていた。しかし実際に交流した中国の学生や市民は、とても温かく、互いの文化や生活について真剣に語り合おうとする姿勢を持っていた。日本のアニメやドラマの面白さや居酒屋文化、アイドルなどの共通の話題も多く、そこには「国家間の関係」ではなく「人と人の関係」があり、友人として共に未来を考えようとする姿があった。私は、こうした交流こそが両国の関係を前進させる原動力になるのだと実感した。

日本と中国は地理的に近く、歴史的にも長い交流の積み重ねがある。しかし同時に、戦争の歴史や領土問題など、乗り越えなければならない課題も多い。今回の訪中体験を通じて強く感じたのは、両国の政府レベルでの対話はもちろん重要だが、それ以上に市民同士、若者同士の理解と交流が不可欠だということである。歴史を正しく学び、後世に正しく伝え、相手の文化や価値観を尊重しながら、個人レベルでの信頼関係を積み重ねていくことが、長期

的には両国の平和で安定した関係に繋がるはずである。実際今回学生と交流した事で、若年層は日本に対しマイナスなイメージをあまり持っていないことを知り少し安心した。

私自身、今回の経験を通じて「過去を学ぶ責任」と「未来を担う役割」を自覚するようになった。日本人として、中国の人々が抱える歴史的記憶に誠実に向き合う必要がある一方で、同時に互いの交流を広げる架け橋となるよう努めることもできるはずだ。今後も学業や仕事を通じて中国との関わりを大切にしたいと感じた。例えば、言語や文化を学ぶことで理解を深め、相互信頼の土台を築く一助になりたいと考えている。

この 7 日間は、私の人生において間違いなく大きな転機となった。異なる歴史と文化を持つ隣国に実際に触れたことは、自分の視野を広げ、国際社会の一員としてどのように生きていくべきかを考えさせられる契機となった。そして何より、九一八博物館で感じた重みを忘れずに、これからも歴史と向き合いながら未来に希望を持ち続けたいと思う。

この 7 日間を安全かつ有意義に過ごすことができたのは、常に私たちを支え、案内してくださった安藤団長を始めとする随行の皆さま、ガイドの方々のおかげです。言葉や文化の違いから不安を感じる場面もありましたが、細やかな配慮と温かい励ましのおかげで安心して学び、交流に集中することができました。

この場を借りて、関係者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

「新しい視点を得られた中国訪問」

3号車B班 東洋大学 上田礼芽

大学在学中、私は様々な国を訪れてきました。その中で強く印象に残ったのは、どの国にも必ず中華街や中国人コミュニティが存在し、そのつながりが非常に強いことでした。世界各地で中国文化が根付いている姿を目にしながらも、私は大国である中国について驚くほど何も知らないことに気づきました。それ以来、中国への理解を深めたいという思いが芽生えました。これまで私にとって中国は、大学に来ていた交換留学生との交流や、アルバイト先で中国人観光客に接客する程度でしか関わりがありませんでした。しかし昨年、漢語橋スピーチコンテストのボランティアに参加したことが大きな転機となりました。中高生が流暢な中国語でスピーチを行い、伝統芸能の変面や中国語の歌を披露する姿に心を打たれ、中国文化の奥深さに魅力を感じました。その経験をきっかけに、ますます中国への関心が高まりました。そして今回、私は100人の仲間と共に初めて中国を訪れ、北京・長春・瀋陽の三都市を1週間で巡りました。それぞれの都市は気候や街並み、雰囲気が大きく異なり、訪れるたびに新鮮な発見がありました。首都・北京は近代的な建物と赤を基調とした壮大な伝統建築が共存し、東京ほど極端に人が集中していないため、意外にも過ごしやすい都市だと感じました。二日間の滞在では時間が足りないほど見どころにあふれていました。次に訪れた長春は、三都市の中で最も涼しく湿度も低く、北海道のように快適な気候でした。都市部でありながら自然が豊かで、落ち着いた雰囲気を持つ居心地のよい街並みが印象的でした。最後に訪れた瀋陽は、統一感のある住宅やビルが整然と並び、再開発の進む新しい都市の姿を感じさせました。中国の急速な発展を間近に体感できたのは大きな驚きでした。また、各地でいただいた食事にも地域性が色濃く表れており、同じ中華料理でも都市ごとに全く違う味わいがあることを知りました。食文化の多様性を実際に体験できたのは現地に訪れないとできない貴重な経験をさせていただくことができました。

さらに、9月12日には九・一八歴史博物館を訪れました。9月18日の節目に近い時期であったため、訪問時は独特の緊張感に包まれていました。展示を通じて改めて実感したのは、日本が加害者側であるという厳然たる歴史的事実です。これまで私は満州事変について断片的な知識しか持たず、その背景や人々に与えた影響について深く理解していませんでした。しかし資料や写真に向き合う中で、自分の無知さを痛感し、同時に歴史を学び続ける責任を強く意識しました。過去を直視し、未来にどうつなげるかを考えるきっかけとなった点で、この訪問は非常に大きな意味を持ちました。

また遼寧大学を訪れた際には、現地に留学している日本人学生と偶然出会う機会もありました。彼女は大学時代に私のように短期で中国を訪れたことをきっかけに文化と歴史に惹かれ、社会人を経験して資金を貯め、現在は瀋陽に留学しているとのことでした。彼女は流暢な中国語を話し、最初は現地の人かと思うほどでしたが、私が日本語を話していると声をかけてくださり、初めて日本人であることが分かりました。彼女自身も留学当初は全く中国

語が話せず、現地で生活するためには必死に学ぶしかなかったと語っていました。1年間の努力でここまで成長した姿を目の当たりにし、私も刺激を受けました。また彼女は瀋陽について「どの都市よりも人々が温かく迎えてくれる場所であり、物価も安く生活しやすい」と話していました。

今回の訪問を通じて、私はこれまで断片的にしか知らなかった中国を、自らの目で見て感じることができました。都市ごとの特色や歴史の重み、人々の温かさを体験することで、インターネットや報道から得るイメージとは異なる中国の姿を学びました。また、学部も出身地も異なる100人の仲間と共に行動したことで、多様な視点を共有でき、一人では気づけなかった新しい発見も数多く得られました。

今後は、この体験を一過性のものにせず、留学生との交流や学びをさらに深めたいと思います。中国語の習得はもちろん、歴史や文化、食を含む多様な側面から積極的に理解を広げていきたいです。そして、社会人になった後も今回の経験を思い出し、今回瀋陽で出会った日本人留学生のように中国との関わりを持ち続けたいと考えています。

「七日間の言葉と文化を越えた学び」

3-B 法政大学 猪股歩佳

今回、北京・長春・瀋陽の三都市を訪問して、中国という国のスケールの大きさに驚かされた。街に立ち並ぶ高層ビルや、広い道路を埋め尽くす車の流れ、集合住宅に無数の部屋が並ぶ様子は、日本では目にすることのない迫力があつた。一方で滞在中の食事からも、地域ごとの味や辛さの違いを感じることができた。どの地域でも料理は大皿で沢山並び、中国の食生活や文化に触れる貴重な体験であつた。

私が訪中への参加を決めたのは、大学の第二外国語の授業で中国語を学んでいることが大きな理由である。一年生の時も今年度の先生も中国出身の方であつたことから、言語を学ぶだけでなく、中国の文化や流行などの話を聞く機会があり、中国という国に興味を持っていた。また、学んだ中国語を実際に使ってみたいという思いもあり、応募を決めた。

吉林大学での交流では、日本と中国の違いを学ぶとともに、ドラマや音楽といった国を越えて共有できるものがあることに気づき、嬉しく思った。中国では大学生のほとんどが寮に住んでいると聞いた。日本では通学時間が多少なりともかかることが一般的だが、中国では学びの場と生活の場が一体になっていることから、勉強に集中するための環境が整備されていると感じた。日本について知っていることを聞いた時には、ドラマ「逃げるは恥だが役に立つ」や、米津玄師さんの曲が挙がった。共通の話題で盛り上げられたことで、異なる国の人とも心を通わせることができると実感した。

遼寧大学での交流では、日本語は一切使わずに中国語と英語で会話を行った。私の中国語力は、大学で週に一、二回、一年半ほど学んだ程度で、聞き取ることに伝えることにも不安があつた。しかし、年齢や住んでいる場所など中国語での質問に簡単に答えられたこともあって、学んだ知識を活かしたことに手応えを感じ、中国語を使って会話できたことに大きな喜びと達成感を覚えた。博物館で説明文の中に学んだ単語を見つけて内容を少し理解できたこと、ホテルやレストラン、買い物で「謝謝」といえば「不客气」と返ってきたことなど、日常の中で言葉が通じる嬉しさも実感した。一方で、十分に読み取れない文章や、思うように言葉にできないもどかしさも感じた。こうした経験から、今後の中国語学習への意欲が高まった。

今回の訪問では、九・一八歴史博物館にも足を運び、戦争の悲惨さや歴史の重みを改めて実感した。展示を通して、国と国との関係を考えてとき、歴史を抜きにして理解することはできないと感じた。展示では、日本人というより、当時の日本の軍国主義が批判されていたことも印象に残っている。日本人としてこの場所を訪れることには複雑な気持ちがあつたが、同じことを繰り返してはいけないという気持ちは共に持つものであると感じた。一方で、大学生との交流や日常のやり取りでは、文化や言葉を通して繋がれることを学んだ。このように歴史と現在の両方を体感したことで、今後中国理解に向けた学びをより深めたいという思いにつながった。

七日間はあっという間に過ぎてしまったが、とても充実した時間を過ごすことができた。実際に訪れるまでは中国という国について、ニュースや SNS で目にした情報を通して得た漠然としたイメージしか持てていなかった。しかし、現地の学生と交流し、日々の生活や興味のあることなどを話す中で、これまでの印象とは違う具体的な理解を得ることができた。他にも訪れた先々で人々の温かさを感じることもでき、必ずまた中国に行きたいと思った。文化や言葉が違って歩み寄り、理解し合うことができると実感した。今後は、より国際交流や異文化理解のための学びを深めていきたいと感じている。

最後になりますが、言葉の壁を越えた交流ができたことや歴史の重みを肌で直接感じられたことは、私にとってかけがえのない財産となりました。今回、このような貴重な機会を設けてくださったすべての方々に深く感謝申し上げます。

「交流を通じて得た気づき」

3-B 静岡文化芸術大学 河合啓帆

私は中国を訪れるのが、今回の訪中国で初めてでした。訪中前、SNS やテレビ番組などで目にする中国に関する情報は、どちらかというと批判的なものが多く、また反日感情を抱いている人が少なくないのではないかという印象を持っていました。さらに、私のアルバイト先にはよく中国からのお客さんが来られるのですが、そこでの接点からもあまり良いイメージを抱くことができず、中国を訪れることに対して少なからず不安がありました。

しかし、実際に中国を訪れた今、その印象は大きく覆されています。現地で生活する人々の姿や文化、歴史に直接触れることによって、新しい発見や気づきを得ることができたからです。まず現地に到着して驚いたのは、中国社会の先進性でした。日本も先進国であると考えていましたが、実際に目にした中国はそれ以上に最先端をいっていると感じました。街を走る車は電気自動車が多く、アプリで簡単に借りられるシェア自転車が至る所に並んでいる様子は、これまで自分が想像していた姿とは大きく異なっていました。また、スーパーや飲食店に限らず、屋台や市場のお店でもキャッシュレス決済が一般的に使われており、時代の進展を肌で感じました。都市部の風景も圧巻で、広い道路、高層ビル群、観光地に集まる多くの人々の活気が相まって、予想をはるかに超えるスケールに感動しました。

一方で、交通事情には文化の違いを感じました。クラクションが頻繁に鳴らされる様子や、譲り合いの少なさは、日本の交通マナーと比べると荒いのではないかと思います。しかし、現地の人にとってはそれが日常であり、むしろスムーズに流れているようにも感じられました。日本的な価値観では一面的に否定してしまいそうですが、これも文化の違いの一つだと理解することが大切なのだと気づきました。

今回の訪中では、歴史を学ぶ機会も多くありました。特に、9月18日が近い時期であったことから、東北陥落史陳列館や「九・一八」歴史博物館などを訪れました。日本での教育では「日本は戦争の被害者である」という側面を強調して学ぶことが多かったように思います。しかし中国の博物館では、日本が加害者として行った侵略や残虐行為が数多く展示されており、その現実を目の当たりにしました。その瞬間、私は「自分たちは被害者であると同時に、加害者でもあった」という事実を強く意識しました。この歴史から目を背けることなく受け止め、平和を追求し続けることこそが、未来を築くうえで不可欠であると痛感しました。歴史認識の違いは国同士の対立を生む原因にもなりますが、だからこそ相互に理解し合う努力を怠ってはならないのだと思いました。

また、現地の学生との交流も貴重な体験でした。中国語、英語、日本語などさまざまな言語を使いながらの会話は難しさもありましたが、その中で伝え合い、理解し合う楽しさを強く感じました。文化や歴史の違いがあるからこそ、新たな発見や学びが生まれることを実感できたのです。互いの価値観を尊重し合いながら共に学ぶことで、国境を越えたつながりを築けることに大きな希望を感じました。

この一週間を振り返ると、訪中前に抱いていた先入観や偏見がいかに関自分の視野を狭めていたのかを思い知らされます。幼い頃から大人たちやメディアを通して自然に刷り込まれた価値観や歴史認識が、自分の中で「当たり前」となり、それが誤解や偏見を生んでいたのではないかと思います。だからこそ、自分自身で現地を見て、耳で声を聞き、肌で文化を感じる事が大切だと痛感しました。相手を知り、寄り添おうとする姿勢が、平和や友好関係を築く第一歩になるのだと思います。

今回の訪中で得られた経験は、私にとって非常に大きな財産です。中国に対する新たな理解が広がっただけでなく、国際社会に生きる一人の人間として、どのように隣国と向き合うべきかを考える契機となりました。これからは、今回の学びを忘れず、中国の魅力や実際の姿を周囲に伝えていきたいと思っています。そして、このような貴重な機会を与えてくださった多くの方々への感謝を胸に、隣国との架け橋となれるような行動を少しずつ積み重ねていきたいです。